



*学校便り作成にあたり、生徒の文章や写真を使用する場合があります。長田中学校個人情報取扱規程を遵守しておりますが、お気付きの点がありましたら学校までご連絡ください。

夏休み前半、終了！ 2学期まであと23日！

もうすぐ夏休み前半が終了します。生徒のみなさん、充実した夏休みを送っていますか。夏休みとともに始まったオリンピックでは、連日、日本選手の活躍が報じられています。メダル獲得に一喜一憂するとともに、競技にかけるアスリートの姿に勇気と元気をもらっています。7時間の時差の関係で深夜に競技が行われ、思わず夜更かしをしてしまっている人も多いかと思いますが、次の日の予定を考えて、できるだけ生活リズムをくづさずに睡眠時間を確保してください。



【自習教室で勉強する生徒の様子】

今年の7月は、観測史上最も平均気温が高かったと報道がありました。部活動等学校で活動する生徒のみなさんは、こまめに休憩を取りながら、水分や塩分を補給しながら活動してください。規則正しい生活を心掛け、体調がよくなるときは決して無理をしないでください。登下校時にはできるだけ日傘を使ったり、帽子をかぶったりして、直射日光を避けるようにしてほしいと思います。

今週末の11日（祝・日）から1週間、学校閉庁期間となります。3年生は引き続き受験勉強を継続し、1、2年生は夏休み前半、頑張った部活動の疲れをとるために十分に体を休めるとともに、最後に焦らないように計画的に夏休みの課題に取り組んでほしいと思います。もちろん、自分の時間もいつも以上に十分ありますから、読書など普段できないことにも取り組んでください。

8月6日は、広島「原爆の日」 被爆79年

広島は6日（火）、被爆79年の「原爆の日」を迎えました。原爆投下時刻の午前8時15分に合わせて開かれた平和記念式典には、原爆で亡くなった人たちの遺族や、地元選出の岸田文雄首相らが参列しました。生徒のみなさんに、こども代表による「平和の誓い」と広島県の湯崎知事のあいさつを紹介します。



【平和記念式典で「平和の誓い」読む小学生】

【平和への誓い】

目を閉じて想像してください。緑豊かで美しいまち。
人のにぎわう商店街。まちにあふれるたくさんの笑顔。
79年前の広島には、今と変わらない色鮮やかな日常がありました。

昭和20年8月6日午前8時15分。
「ドーン！」という鼓膜が破れるほどの大きな音。
立ち昇る黒味がかかった朱色の雲。
人も草木も焼かれ、助けを求める声と絶望の涙で、まちは埋め尽くされました。
ある被爆者は言います。あの時の広島は「地獄」だったと。
原子爆弾は、色鮮やかな日常を奪い、広島を灰色の世界へと変えてしまったのです。

被爆者である私の曾祖母は、当時の様子を語ろうとはしませんでした。
言葉にすることさえつらく悲しい記憶は、79年経った今でも多くの被爆者を苦しめています。

今もなお、世界では戦争が続いています。
79年前と同じように、生きたくても生きることができなかつた人たち、明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。本当にこのままでよいのでしょうか。

願うだけでは、平和はおとずれません。
色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。

一人一人が相手の話をよく聞くこと。



「違い」を「良さ」と捉え、自分の考えを見直すこと。

仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。私たちにもできる平和への一歩です。

さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。

平和記念資料館を見学し、被爆者の言葉に触れてください。そして、家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合しましょう。

世界を変える平和への一歩を今、踏み出します。



令和6(2024年)年8月6日

こども代表 広島市立祇園小学校6年加藤晶・広島市立八幡東小学校6年石丸優斗

【広島県知事あいさつ】

79回目の8月6日を迎えるにあたり、原爆犠牲者の御霊に、広島県民を代表して謹んで哀悼の誠を捧げます。そして、今なお、後遺症で苦しんでおられる被爆者や御遺族の方々に、心からお見舞いを申し上げます。

原爆投下というこの世に比類無い凄惨な歴史的事実が、私たちの心を深く突き刺すのは、「誰にも二度と同じ苦しみを味わってほしくない」という強い思いにかられた被爆者が、思い出たくもない地獄について紡ぎ出す言葉があるからです。その被爆者を、79年を経た今、私たちはお一人、お一人と失っていき、その最後の言葉を次世代につなげるべく様々な取組を行っています。

先般、私は、数多の弥生人の遺骨が発掘されている鳥取県青谷上寺地遺跡を訪問する機会を得ました。そこでは、頭蓋骨や腰骨に突き刺さった矢尻など、当時の争いの生々しさを物語る多くの殺傷痕を目の当たりにし、必ずしも平穏ではなかった当時の暮らしに思いを巡らせました。

翻って現在も、世界中で戦争は続いています。強い者が勝つ。弱い者は踏みにじられる。現代では、矢尻や刀ではなく、男も女も子供も老人も銃弾で撃ち抜かれ、あるいはミサイルで粉々にされる。国連が作ってきた世界の秩序の守護者たるべき大国が、公然と国際法違反の侵攻や力による現状変更を試みる。それが弥生の過去から続いている現実です。

いわゆる現実主義者は、だからこそ、力には力を、と言う。核兵器には、核兵器を。しかし、そこでは、もう一つの現実は無視されています。人類が発明してかつて使われなかった兵器はない。禁止された化学兵器も引き続き使われている。核兵器も、それが存在する限り必ずいつか再び使われることになるでしょう。

私たちは、真の現実主義者にならなければなりません。核廃絶は遠くに掲げる理想ではないのです。今、必死に取り組まなければならない、人類存続に関わる差し迫った現実の問題です。

にもかかわらず、核廃絶に向けた取組には、知的、人的、財政的資源など、あらゆる資源の投下が不十分です。片や、核兵器維持増強や戦略構築のために、昨年だけでも14兆円を超える資金が投資され、何万人ものコンサルタントや軍・行政関係者、また、科学者と技術者が投入されています。

現実を直視することのできる世界の皆さん、私たちが行うべきことは、核兵器廃絶を本当に実現するため、資源を思い切って投入することです。想像してください。核兵器維持増強の十分の一の1.4兆円や数千人の専門家を投入すれば、核廃絶も具体的に大きく前進するでしょう。

ある沖縄の研究者が、不注意で指の形が変わるほどの水ぶくれの火傷を負い、のたうちまわるような痛みと苦しみにながら、放射線を浴びた人などの深い痛みを、自分の痛みと重ね合わせて本当に想像できていたか、と述べていました。誰だか分からないほど顔が火ぶくれしたり、目玉や腸が飛び出したままさまよったりした被爆者の痛みを、私たちは本当に自分の指のひどい火傷と重ね合わせることができていのでしょうか。人類が核兵器の存在を漫然と黙認したまま、この痛みや苦しみを私たちに伝えようとしてきた被爆者を一人、また一人と失っていくことに、私は耐えられません。

「過ちは繰り返しませぬから」という誓いを、私たちは今一度思い起こすべきではないでしょうか。

令和6年8月6日

広島県知事 湯崎英彦

【TBS NEWS DIG 記事参照】

今年で戦後79年を迎えます。戦争を生き延びた人は高齢化し、当時のことを知る人はどんどん減ってきていますが、平和への思いを若い世代へ託そうと、発信を続ける人もいます。私たちは、同じ苦しみを二度と繰り返さないために、戦争を知る人からのバトンをしっかり受け取り、後世へとつなげていかなければなりません。生徒のみなさん、この機に「平和」について考えてみてください。